

講座 「古代山城屋嶋城跡から歴史と地域を考える」

## 大宰府と羅城

九州国立博物館 赤司善彦

はじめに 一大宰府とは • 羅城とは

大宰府は「おほみこともちのつかさ」とも読む。大君の御言（命令）を捧持して地方を支配する行政官の役所を国府といい、その大いなるものといった意味である。今から1300年ほど前に、現在の太宰府市を中心に建設された古代で最大の地方官庁のこと。当時の九州（西海道）を統括する内政だけではなく、外交儀礼と縁辺防備という軍事を担った。701年の大宝律令により行政機構が整備されたが、大宰の名称は609年に登場する。昭和43年から開始された大宰府の発掘調査が本格的に行われるようになり、考古学の面からの解明が進んだ。しかし、その成立はいまだ謎の部分が多い。これらの遺跡は大宰府政府跡や周辺の大宰府跡、大野城跡、水城跡、観世音寺などの遺跡は、約900ヘクタールの広大な面積が特別史跡や史跡として保存され、大宰府史跡とよんでいる。

大宰府と太宰府天満宮（菅原道真さんの墓所） 帥（長官）は従三位

羅城とは古代都市を取り囲んでいた城壁。中国の都市には外敵防禦のため、堅固な羅城が築かれた。羅城門はこの羅城に開かれた城門のこと。日本では羅生門とも言う。

679(天武8)年 11月、竜田山・大阪山に閑所を設け、難波に羅城（城壁）を築く。

### 1 文献記録が語る大宰府の成立

大宰府の成立については、ヤマト政権から派遣され筑紫の那津（現在の博多湾沿岸）に常駐した筑紫大宰とその属僚組織にまでその起源が遡るとする見方は古代史では一般的である。筑紫大宰の史料上の初見は推古一七（609）年であるが、これより以前の宣化元年（536）年には、那津口に修造された官家、すなわち那津官家に集めた穀物が凶作への備えと外国使節の饗応に充てられていたと『日本書紀』は伝える。去來の閑門である筑紫に出兵基地を設置し、饗応は律令制下の大宰府の役割に通じることから、この那津官家に7世紀初頭以降には筑紫大宰が常駐し、これらが現在の地に移転して大宰府が成立したと考えられているのである。

磐井の乱以後の北部九州の平定や、隋の成立を受けて外交政策に積極的に乗り出したことから、筑紫において軍事・外交とこれを支える内政の役割が重要視されたことがその背景にあると思われる。那津官家は実在したとしても、那津官家と大宰府とを関連づけて考えるためには、那津官家の官司としての機構が定かでないため検討の余地は残されている。

この那津官家の所在地については博多湾沿岸のいくつかの地点が候補とされてきた。近年、博多駅南側一帯に広がる比恵遺跡が、那津官家に関連する遺跡として注目されている。福岡市教育委員会の精力的な調査の結果、柵に囲まれた60mの方形区画内で柵に沿って整然と配置された倉庫群や中央の広場が確認されている。その規模や構造は後の官衙正倉と類似する。6世紀中頃から7世紀にかけての土器が出土し、当時の入り江近くに立地することからも、那津官家に伴う倉庫群の可能性が高い。

さて、筑紫大宰の名称は、7世紀を通じて登場するが、頻繁に登場するのは白村江敗戦以後のことである。筑紫大宰に対する外国使節の応接機能や防衛機能の強化と考えられる。ところで、大宰という地方官の制度は筑紫だけでなく7世紀末頃には、吉備・周防・伊予にも設置されていた。これ

が大宝律令施行後は、筑紫大宰府のみ存続したと考えられる。

大宰府は白村江の敗戦後に、那津官家から現在地へ移転した。

663年の白村江での敗戦後、倭は唐・新羅連合軍の侵攻を想定し、ただちに辺境防備とその伝達システムを整備するために防人や烽を対馬・壱岐・筑紫に置くとともに、水城を築き、翌年には長門国に城を、筑紫国には大野城・基肄城、を築いたと『日本書紀』は記す。

#### 『日本書紀』・『続日本紀』の用例の変化

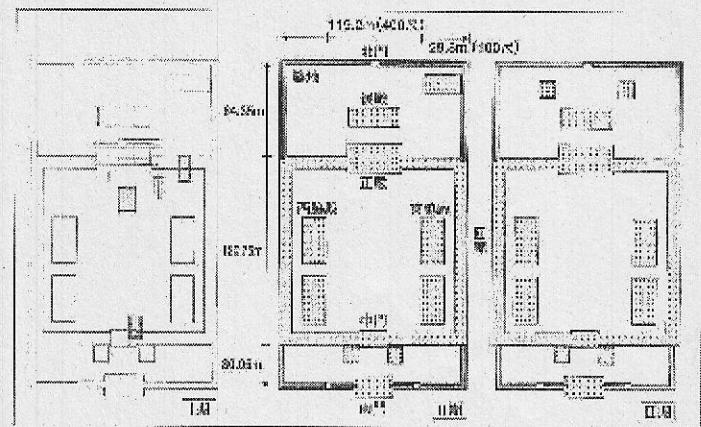
1 推古朝期	筑紫大宰	5 持統～文武朝期	筑紫大宰（帥・率）
2 大化～齊明	筑紫大宰帥	6 文武期	筑紫總領
3 天智朝期	筑紫率（帥）	7 大宝～	大宰帥
4 天武～持統朝期	筑紫大宰		

## 2 考古資料が語る大宰府の成立

昭和43年に大宰府政庁跡で開始された発掘調査によって、政庁の規模と変遷、そして官衙の広がりや出土木簡などからこれまで窺い知れなかつた歴史的な事実が明らかとなってきた。特に平成10年に実施された正殿の調査によって、成立期の建物配置がおおよそ判明した。こうした考古学的初見と文献史料はどのように整合性を持つのかが課題の一つである。

- ・政庁の規模と変遷がわかった。大宰府は奈良時代に成立したと考えられていたが、7世紀代の下層の遺構が見つかった。

- ・政庁Ⅰ期—古段階の遺構群の評価をめぐって
- ・真北方位の建物の意義



## 3 白村江敗戦以後の筑紫の国防戦略

663年の白村江での敗戦後、天智朝は、ただちに権力集中のためにさまざまな国制改革に着手し、同時に唐・新羅連合軍の侵攻を想定した防衛体制の強化に乗り出す。『日本書紀』及び『続日本紀』は別表のような年次で古代山城を拠点とした辺境防備とその伝達システムの整備を記している。対馬・壱岐・筑紫には防人や烽を置き、また筑紫には、百濟の兵法や築城技術を活用した水城や大野城・基肄城といった古代山城を築いて侵攻に備えた防備と、通信手段が整えられている。

664年 於對馬嶋壱岐嶋筑紫國等置防與烽 又於筑紫築大堤名曰水城

665年秋八月遣達率答本春初築城長門國、遣達率憶礼福留達率四比福夫於筑紫國大野及櫟二城

## 4 大野城と基肄城・水城 そして古代山城の築城

水城 水城は福岡平野から筑紫平野へと抜ける二日市低地帯の北端に位置する。幅80m、高さ10m以上、長さ1.2kmの長大な人工土壘が築かれ、東は大野城のある四王寺山丘陵へと接続する。これまでに土壘前面（博多湾側）で幅60mの濠が確認され、木樋と呼ぶ導水管も調査されている。

東西2カ所に門が付設され、平成5年から実施した調査では3時期に変遷する門遺構や、土壘の構造が明らかにできた。この水城大堤のさらに西側でも小規模な土壘が5カ所で知られている。小水城と呼んで区別するが、その構造は基本的には同じである。

**大野城** 水城とともに一連の防衛ラインを形成しているのが大野城で、政庁の背後にある四王寺山に築かれている。四王寺山は北側の大きな谷を囲むように尾根筋が巡り、この尾根に沿って城壁が築かれている。城壁は総延長6.5km、土壘と谷部の石壠からなる。この内側では谷に向かって延びる丘陵や谷筋の段丘等を整地し、倉庫を中心とした約70棟の建物が8カ所のエリアに分散して配置される。建物は5つのタイプに分類され立地や建物構造により築造年代が異なることが判明している。城壁には9ヶ所に城門が設置されている。このうち、太宰府口城門が調査され、3時期の変遷が明らかとなった。また、創設期の門に使われたコウヤマキは年輪年代測定によると外側の年輪が648年に形成されたものであり、『日本書紀』に記された築城年代に近似している点が注目される。

**基肄城** 大野城が太宰府の北の備えであるならば、基肄城が南の備えとなろう。基肄城は大宰府政庁のほぼ真南およそ7km離れた位置にあって、基山を中心とした2峰の丘陵に土壘を巡らせる。南に開析する筒川の谷を取り込み、これを石壠で塞ぐ。石壠には人が通れるほどの水門が設けられている。城内からこれまでに40棟前後の建物が確認されているが、本格的な発掘がなされていないために詳細は不明である。大野城と基肄城は奈良時代以降になると非常に備えて稻穀の備蓄を行っていた。

### 古代山城

この水城・大野城・基肄城そして近年発見された阿志岐山城は大宰府地域を防御する配置となっている。また北部九州の神籠石山城も大宰府を中心にした交通路に位置している。これらの古代山城は、構造や立地がよく似ており、筑紫大宰の強い関与がうかがえる。

### 5 大宰府に羅城はあったのか

筑紫の防衛網（大野城・水城・基肄城・阿志岐山城）の内側には、奈良時代に整備された大宰府政庁の前身が置かれていた。筑紫の防衛網は自然地形を巧みに取り入れていることから、これも城壁の一種と考えた「羅城」とみなす考え方もある。

北端の水城からさらに西へは小水城によって間道を塞ぎ、背振山地の自然地形を利用して基肄城へと至り、東は大野城から三郡山あるいは高雄丘陵の山稜線とを結ぶことで北方から東西にかけて通路を遮断した事になる。南の筑紫平野への開口部にはこれまでのところ明確な防衛施設の形跡は明らかではない。有明海側からの侵攻は想定されていなかった可能性もある。これは今後の課題となる。いずれにせよ大宰府政庁を中心にこれらの軍事拠点を配置し、全体として本土防衛の中核拠点と位置づけられたと見ることができよう。

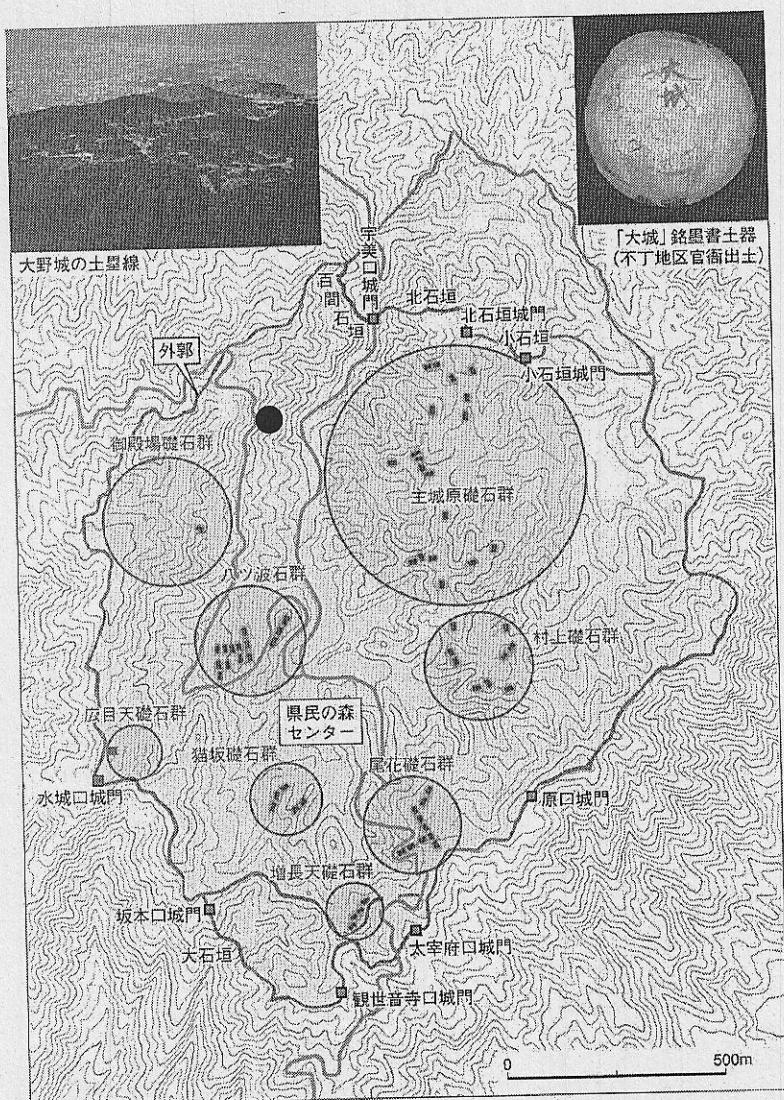
果たして羅城はあったのか？この防衛のマスターplan作成にあたっては、百濟武官が関与していることから、扶余の羅城の考え方を考慮する必要がある。

### 泗沘（扶余）の羅城

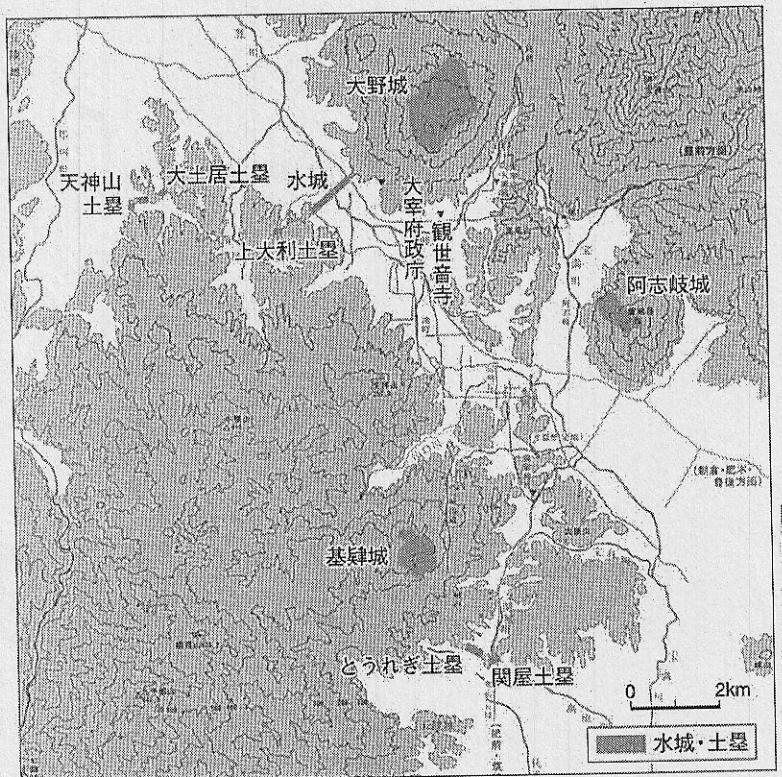
扶蘇山城と王宮（官北里遺跡）・東羅城と水城

政庁Ⅰ期一古段階の遺構群の評価をめぐって

朝倉橋廣庭宮の所在



大野城平面図



大宰府史跡と羅城

# 古代山城関連記事

西暦	記事内容	出典
	狹穂彦、稻を積みて城を作る。これを稻城という。火を放ち、その城を焼く	『日本書紀』垂仁五年
	稻城を造りて待つて戦う	『日本書紀』雄略一四年
587年	稻城を築きて戦う	『日本書紀』崇峻即位前紀
644年	家の外に城柵を作り、門の旁らに兵庫をつくる	『日本書紀』皇極三年
645年	法興寺に入り、城となして備える	『日本書紀』皇極四年
647年	淳足柵を造り、柵戸を置く	『日本書紀』孝德三年
648年	磐舟柵を治す	『日本書紀』孝德四年
658年	都岐沙羅の柵造に位二階を授く	『日本書紀』齊明天年
660年	肅慎おのが柵によりて戦う	『日本書紀』齊明天年
664年	対馬島・壹岐島・筑紫国などに防と烽を置く。筑紫に水城を築く	『日本書紀』天智三年
665年	長門国に築城、筑紫国に大野・様の二城を築く	『日本書紀』天智四年
667年	倭国に高安城、讃吉国に屋崎城、対馬國に金田城を築く	『日本書紀』天智六年
669年	高安城の工事を中止する	『日本書紀』天智八年八月
同 年	高安城を修理し、畿内の田税を収める	『日本書紀』天智八年冬
670年	高安城を修理し、穀・塙を貯え、長門に一城、筑紫に二城を築く	『日本書紀』天智九年
672年	筑紫大學、筑紫國の城を高く堀を深くして外敵に備える	『日本書紀』天武元年六月
同 年	三尾城を攻め落とす	『日本書紀』天武元年七月
同 年	高安城の税倉が焼失する七月	『日本書紀』天武元年
676年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』天武四年
680年	電田山、大坂山に聞あさ、難波に難城を築く	『日本書紀』天武八年
689年	筑紫に位記(諒令)を送り、新城を視察させる	『日本書紀』持統三年八月
同 年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』持統三年十月
698年	大宰府に大野・基羅・惣智の三城を修理させる	『続日本紀』文武二年五月
同 年	高安城を修理する	『続日本紀』文武二年八月
699年	高安城を修理する	『続日本紀』文武三年九月
同 年	大宰府に三野・稻積の二城を修理させる	『続日本紀』文武三年十二月
701年	高安城を廃する	『続日本紀』大宝元年
712年	河内国高安の烽を廃し、高見の烽と大倭國に春日の烽をおく	『続日本紀』和銅五年正月
同 年	高安城に行幸する	『続日本紀』和銅五年八月
719年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停廃する	『続日本紀』養老三年
756年	怡土城を築く	『続日本紀』天平勝宝八年
772年	筑紫営大津城監を罷む	『続日本紀』宝龜三年